

山 域：扇ノ山
場 所：鳥取県
日 時：2006/01/28-29（土日）
天 候：小雪混じり / 快晴
コ ー ス：海上～上山高原(泊)～扇ノ山
テ ー マ：新年会
メンバー：石野・玉田・大塚・大倉・福迫・大本



小ズッコ尾根

なんて静寂な夜明けなんだろう、耳をすませば小鳥があちらこちらでモーニングソングを囁いている、ときおり聞こえるのは真っ青の空から舞い降りる一陣の疾風に白化粧をほどこした木々がささやき合う音くらいである。

生きとし生けるもの、あらゆる動植物の命と共鳴し大いなるものに生かされている、満ち足りた思いに浸るこのひととき。この大自然のリズムに合わせてケーナを吹きたくなってきた（もっと練習しよう）



上山高原

今年はまれにみる大雪で信州地方で雪被害でとんでもない災害が多発している。この兵庫県でさえももう今年の雪予算は使い切って大赤字である。

そんな事もあり心許ないのだが、昨年から計画していた海上村から上山高原の避難小屋で泊まり、次の日に小ズッコ尾根に上がり扇ノ山を目指すことにした。

28日 小雪混じり 海上村 --- 上山高原避難小屋

姫路を5時に出発して播但道-9号線で八鹿の玉ちゃんと合流して一路海上へ・・・。

さすがにこの時期はゲレンデプレーヤーが多くて道も混んでいる。

海上村に着くと、神戸からきたと言って早速テレマーカー3人が準備をしていた、青下から仲間が10人ほど来て小ズッコで合流するそうである。

我々はトランジットも慣れたものでさっさと神戸組パーティーをおいて8時にスタートした。

村を出ると雪はシールでくるぶしくらいで快適に林道を登行していく。小雪混じりの天候であるが、所々林道をカットしながら少しづつ高度を上げて行くと、昨年の秋からは想像もつかない白一色の上山高原にたどり着いた。約2時間半である。

真新しい避難小屋は完全に一階が雪で埋まり、2階の冬季用出入口からおじゃまする。

中はウレタンマットが用意してあり早速に使わせてもらった。真っ暗の巨大冷蔵庫の中で早速に暖をとる準備にかかるが、氷ノ山山頂小屋の鉄筋作りとちがい木造作りなので暖かみを感じる。

昼食をとって外に出ると、青下から来た10人の登山パーティが着いていた。ものものしい装備で小ズッコ小屋付近でテントと張るらしい。

ガスも取れてきたので高原の三角点に登り滑ることにする。秋にはここから東の谷までが素晴らしくいい斜面に見えて期待していたのだが、雪が付くと小さなブッシュは隠れているものの小尾根が入り乱れて形相がまるで違っていた(-_-;)。適当に斜面を探して北斜面へと滑り込んで遊んだ。





この斜面で転倒



クラッシュ

小屋へ帰る途中に前方にいい斜面を見つける、地図で確認すると1015 mピークである。早速に二手に別れて小尾根を登り詰めることにする。ここからの眺めは最高である。先ほどの登山パーティが雪中をもがいて稜線を登っているのが見える。

パウダーに
トップ食われて
肉離れ

しかし、このピークも登ったはいいものの一体何処を滑るのや?、と言った具合にみんな登りの好き

きなメンバーである。少しではあるがなんとか良さそうな斜面を見つけて「さぁ、行きますかっ!」となるが、これまた雪崩れそうな急斜面で、ビデオを回していたら私一人置いてけぼりを喰ってしまった(>_<)。あわてて滑ろうとすると重パウダーに右スキートップを取られて豪快に前転したとたんに、治りかけのふくらはぎをまたまた「ピッ!」といわしてしまった(>_<)。もうそれからと言うものの歩くことも滑ることもままならないしまつ。

なんとか小屋に辿り着いたはいいものの完全に戦意喪失であった。石野氏にテーピングを施してもらい初回からみんなには迷惑をかけて

しまった。しかし、これも教訓と開き直り新年会の乾杯に入りほろよく酔ってシュラフに潜り込んだ。

29日 快晴 上山高原避難小屋---扇ノ山---上山高原---海上村

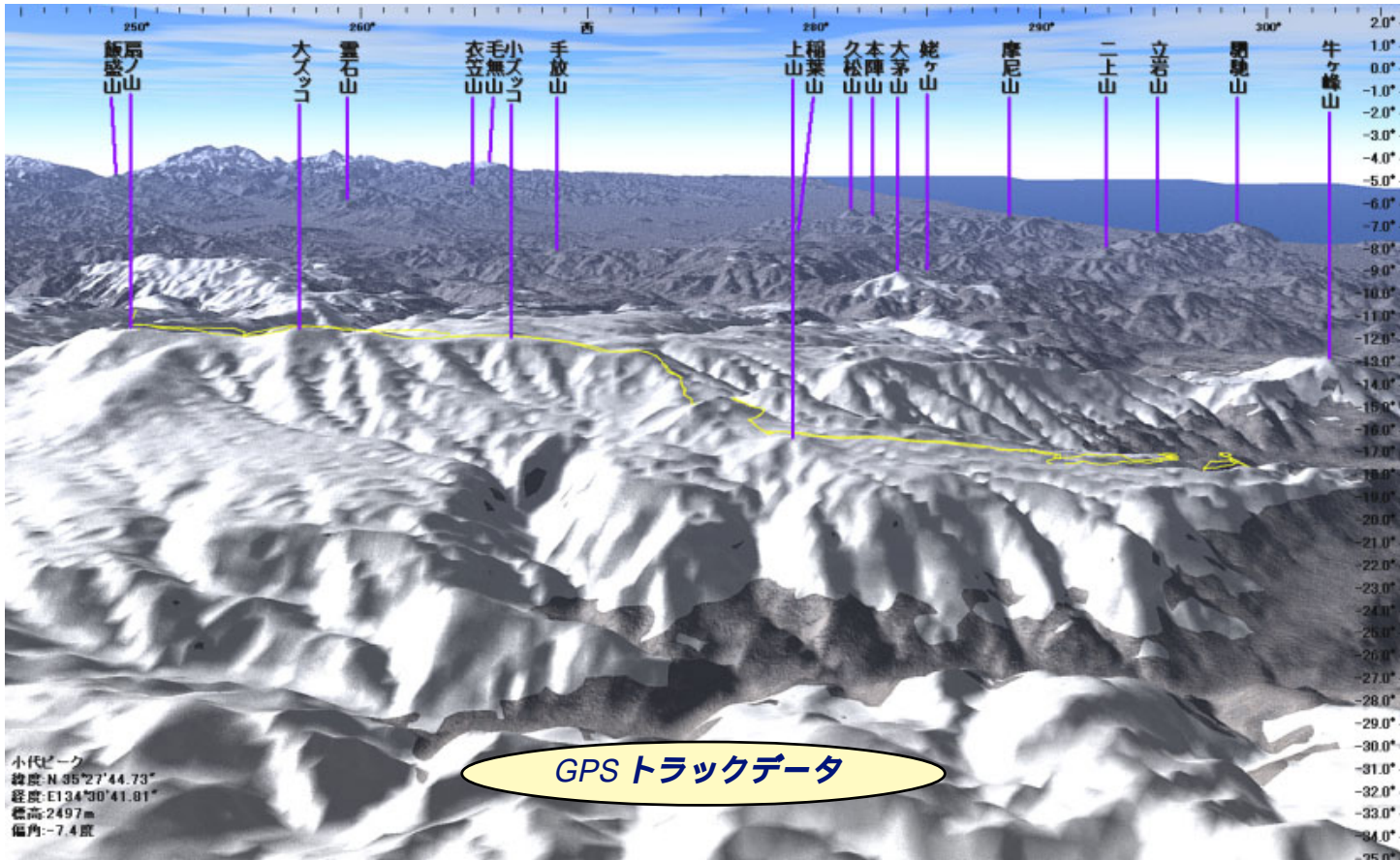
5時に起床。寝ている時は全く痛くもないのだが、動かすと痛くて踏ん張れない。これではとても空身であつてもみんなに迷惑がかかるので山頂へは行けない。



朝日浴び
見送る背なが
眩しくて

朝日が上山高原をオレンジ色に染めかけてきた頃、彼らを見送る。いつしか氷ノ山へ単独で登り、山頂付近でガスに巻かれて強風にあおられながらテントを張って過ごした次の日も今と同じく快晴だった。朝起きると山頂小屋は目の前にあったのを思い出してしまった。

なんて静寂な夜明けなんだろう、耳をすませば小鳥があちらこちらでモーニングソングを囁いている、ときおり聞こえるのは真っ青の空から舞い降りる一陣の疾風に白化粧をほどこした木々がささやき合う音くらいである。生きとし生けるもの、あらゆる動植物の命と共鳴し大いなるものに生かされている、満ち足りた思いに浸るこのひととき。この大自然のリズムに合わせてケーナを吹きたくなってきた(もっと練習しよう)。



朝焼けの雪原



大本



玉ちゃん



石野氏



福ちゃん



大倉氏